桃山附中同窓会報

発行所
学藝大学附属桃山中学校
同窓会
京都
編集者　康二松

新会長に田中勝彦君

常任委員会発足す

昨年五月の総会で改正された会則に従って、常任委員十名が委員会により選出されたが、更に常任委員の互選により会長に四期生の田中勝彦君が選ばれた。同時に副会長二名は会長の指名により、会計一名は常任委員の互選により決定した。ここに本同窓会は、今迄の基礎の上に立ちながら、新しい発展の第一歩を踏み出す事となった。常任委員十名の氏名は次の通り。

【会　長】田中勝彦　四期生
【副会長】小島秀夫　四期生
【副会長】川崎之彦　六期生
【会　計】中坊安紀子　五期生
天野眞子　五期生
鎌田光三　五期生
篤川忠臨　六期生
竹内貫一　五期生
二松　康　五期生
湯浅明彦　五期生

田中勝彦君経歴
第四期生、堀川高校卒、現在貴都大学工学部三回生、前会長

常任委員会とは　（編記）

本会会則の第七条、第八条、第九条及び第十三条にある様に、常任委員会は委員会が同窓会の機能を持つのに対して、いわば内閣の役割を果すものであって、会務事業全般の運営計画の任にあたる。

会長に就任して

新会長　田中勝彦

一昨年の総会で会長に選ばれて以来、何をするというともないうちに二年経って、会則が変って後はじめての会長に再び就任致しました。大体この前の任期に会務が順調に運営されてきたのは偏に小島君その他常任委員の諸君のお陰で、名だけは会長であり乍ら十分に働きが出来なかったことを深く謝しています。しかし、本会の現状や、他様のいろいろ六場合を長間きし乍ら考えるのですが、同窓会の意義とはどのようなことにあるのでしょうか？会則に書いてある文章をみて、それではもう少し具体的にはどんなことになるのかと考えると、僕にはそれが分っているようでもあるのですが、分っていないんだという事がわかります。結局、人と人との間柄の問題に行きつくことはわかるのですが、僕達のまわりを見回してみるとき、すなおな人間関係の展開を妨げる要素があまり多きすぎはしないでしょうか。そして、僕が、他の人達が同窓会をどのように考えているかを知って本会の運営に参考にするために本会の意義とはどのようなことに関して考えるのかを、僕の思うままに書いてみたいと思います。

会則の第一条に「会員相互の親睦を図り、会員の品位を高め、会員の福利増進を図る」とあります。この目的は、僕達の一人ひとりの力ではどうにもならないものもあるでしょう。しかし、それとてもみんなが十分理解し、協力するならば少しずつでもよくなることは確実でしょう。ましてや内にあるものについては個人の反省と努力とでどうにでもなるものです。そして、僕達が、この同窓会を本当に意義あるものにすることができるのは、その努力が発揮されたときでしょう。

つい話が長くなりましたが、これからの二年間、僕達の同窓会をよりよいものにする為皆様と共に多くのことを考えて行きたく思います。

再び校舎移轉す

旧學大桃山分校へ

記　寺本　悦

今年の秋に卒業生の方をもお招きして十周年記念行事を計画している。校舎移転の決ってからの或る日、卒業生の人から「先生は私達の思い出を此所彼所に秘めながら十年は流れたのだ。時には三年間のアルバムのページがばらばらにちぎれた学年もあったけれど……」との新年に、誘がかけたようにしばらくは無言で座っていたこともあった。新しく明るい文部省規格のあの学び舎、設備などの点から考へれば少しは不足な面もあり更に土を踏んだ事は歴史やバレーのコートをつくればならなかった。

しかし常に緑の風がおおるあの丘は我等をその中で十分はぐくんでくれたのだ。

六学級の中学で立派としての講堂や体育館、更にクラブ室が必要とされ、周囲には塀があること が望ましく、国鉄に遮断機のない危険も手伝い当時の大学分校との交換問題が発知として話題にあり、新校舎の生みの親である旧建設後援会の方々の御意見を十分承り、卒業生の方々の御協力を仰ぎ、同窓会の皆様の御賛成を得たのである。

校舎移転の決ってからの或る日、卒業生の人から「先生は私達の心のいこいの場所をどう思っているのですか、月が流れかよってもたつかしんでいるのに……」との新年に、誘がかけたようにしばらくは無言で座っていたこともあった。新しく明るい文部省規格のあの学び舎、設備などの点から考へれば少しは不足な面もあり更に土を踏んだ事は歴史やバレーのコートをつくればならなかった。

しかし常に緑の風がおおるあの丘は我等をその中で十分はぐくんでくれたのだ。

六学級の中学で立派としての講堂や体育館、更にクラブ室が必要とされ、周囲には塀があること が望ましく、国鉄に遮断機のない危険も手伝い当時の大学分校との交換問題が発知として話題にあり、新校舎の生みの親である旧建設後援会の方々の御意見を十分承り、卒業生の方々の御協力を仰ぎ、同窓会の皆様の賛成を得たのである。

ここで方面をかえて現在の生徒諸君に三ヶ月の住み心地について聞いて見よう。

先ず良い点としては、樹木などが多い為か、どこか学校らしく落ついたふん囲気である。次に広いので比較的静かであり、運動場が美しく木陰も楽しむことが出来る等であるが、欠点としては、高所からの見晴しがなく教室の中も古く暗い感じである。少さい付属物が多くすっきりしない。便所も感じが悪いと云う事をもらしている。

何れにしても卒業生の多くの人々の母校の校舎が変ったことは事実である。しかしながら開合近くでもあり全く縁のない所でもないのだから喜を悪しないようにして時折訪れていただきたい。秋の十周年行事がその役割を少しでも果してくれたら幸いであると考えている。最後は卒業生諸氏の御活躍を期待し、御健康を私達と共に願っているのに、あの高台の一角の草木もあることを申し添え諸君等が集まった機会を利用して校舎への別れと感謝の意を表したいとも思っている。

同窓会の皆様へお願い

育友会長　岡本知蔵

皆様方に紙面を通じて初めてお目にかかります。私此の度、附属中学育友会会長をお引き受け致しまして、母校の為に及ばず乍らの努力を払っています。

当中学は昨年度に桓武御陵より、旧学芸学校に移転と云う大事業を行い、皆様方には顔染の少い而も広大な校舎で後輩の人達が勉学にいそしんでいます。

拙早いもので中学創設以来、本年は丁度十周年に当りますので、移転の披露と十周年記念とを兼ねて何か事業をやってはどうかとの声が上り、中学職、在校生、育友会諸役員が色々と考えていますが、更に歩を進めて同窓会の皆様にも呼びかけて良いお智慧を拝借併せて僅少の援助をも仰ぎ度く存じます。

日取りは十一月初旬の文化祭と併行する予定で、内容はこれから皆様のお力で決めて戴きますが、文化的、体育的両方面に亘り多彩な行事を企画致したく思います。

皆様方に紙面を通じて初めてお目にかかります。私此の度、附属中学育友会会長をお引き受け致しまして、母校の為に及ばず乍らの努力を払っています。

当中学は昨年度に桓武御陵より、旧学芸学校に移転と云う大事業を行い、皆様方には顔染の少い而も広大な校舎で後輩の人達が勉学にいそしんでいます。

拙早いもので中学創設以来、本年は丁度十周年に当りますので、移転の披露と十周年記念とを兼ねて何か事業をやってはどうかとの声が上り、中学職、在校生、育友会諸役員が色々と考えていますが、更に歩を進めて同窓会の皆様にも呼びかけて良いお智慧を拝借併せて僅少の援助をも仰ぎ度く存じます。

日取りは十一月初旬の文化祭と併行する予定で、内容はこれから皆様のお力で決めて戴きますが、文化的、体育的両方面に亘り多彩な行事を企画致したく思います。

昭和三十一年度会計報告

新年度の開始と共に、役員の改選が行われ、新役員が決定した。会計は前年度から引き続き、第五期生の中坊安紀子さんの担当となり、今年度も御苦労願う事となりました。

尚、昨年度の会計報告は次の通りです。

収入の部

前年度繰越金	
総計	三三、〇〇〇
入会費	二八、五〇〇
計	六一、五〇〇

支出の部

バッチ製作品	三、八五〇
印刷費	二〇、〇〇〇
総会費	三、〇五〇
交通費通信費	八、二七三
雑費	二、四五一
委員会費	三〇〇
計	三七、九二五
総計	残高二三、八七五円

一九五七年四月
会計係　中坊安紀子

同窓会委員名簿

一九五七年六月現在

一期生	今井日出男	本多和子	
	富部厚人	井口昭子	
二期生	新国　巡	岡本清子	
	井上　晃	中津川和子	
三期生	星野伊佑	山田眞子	
	四方有生	伊吹櫻子	
四期生	岩淵忠行	大槻和子	
	小鳴秀夫	機本豊子	
五期生	鎌田光三	天野眞子	
	富脇正行	中坊安紀子	
六期生	高田等信	小浮紫喜代子	
	宇田　優	高田周子	
七期生	間岡　寛	山田治子	
	毛戸清男	美濃口英子	
八期生	田中　洋	近藤雅子	
	小鳴　宏	中川佐知子	
九期生	高須健次	小野操子	
	佐々木伸太郎	竹内陽子	

同窓会委員名簿

一九五七年六月現在

一期生	今井日出男	本多和子	
	富部厚人	井口昭子	
二期生	新国　巡	岡本清子	
	井上　晃	中津川和子	
三期生	星野伊佑	山田眞子	
	四方有生	伊吹櫻子	
四期生	岩淵忠行	大槻和子	
	小鳴秀夫	機本豊子	
五期生	鎌田光三	天野眞子	
	富脇正行	中坊安紀子	
六期生	高田等信	小浮紫喜代子	
	宇田　優	高田周子	
七期生	間岡　寛	山田治子	
	毛戸清男	美濃口英子	
八期生	田中　洋	近藤雅子	
	小鳴　宏	中川佐知子	
九期生	高須健次	小野操子	
	佐々木伸太郎	竹内陽子	

『同期会現状報告』

一期生諸氏へ

お互いに多忙な日々の連続ですっかり御無沙汰致しております。中学を出て以来、一度も再会した事がない友もいれば、度々顔を合して談話する友もいる。そんな事を考えるにつけても、この辺で懇案の顔見世会をしてはどうかと思っています。一期生だけの会合は五年振りでしょうか。今秋さわやかな日を選って通知致しますので、その節には是非参集して下さい。

世話係は本多和子さんと私がやらせて頂きます故見よしく。

（今井日出男　記）

第一期同窓会

私達の二期生は二組を区別してのクラス会としたことはなく、いつも同期会の幹事は常々の催しを同期生が心の故郷としてくれるよう念願し、高等三年の年一年を除いては毎年春休みに計画して来ました。集いの悪い年もありましたが、和気藹々な雰囲気は他の集いには期待出来ぬ楽しさで、又毎年のそれに年齢よりも来る成長の跡が見られたのは秘かな楽しみの一つでした。第一回府中教室第二回鳳山、第三回学芸ラストハウス。第四回岡崎麟庵、第五回先斗町中華料亭「操保楼」、第六回四山会鳳料亭「ふじ」。各組に各学校へ分れていたので、概しておとなしく清潔がいい様に思われる。

第三期生活動状況

九十九（つくも）会と称する同期会を毎年欠かさず開いて来た。時にては二年間に云うものは、春秋二回にわたってハイキング・コンパと熱心なるのだった。が出席する人の顔ぶれもそろそろ決まりきった様で又組入も出尽した感があり、今春は最後を迎える。秋頃には又南の高まるのを期待しよう。

その他にかの水書の時に、有志の者が附中の体育祭で売店を開き、見舞った事である。その後も続けて聞かせてもらって、その一部は中学、寄附、残りは九十九会の運営資金にあて来た。がその必要も聞もなく無くなるであろう。

第四期生同期会

私達第四期卒業生の同期会は、おそらく最も活動の低調な期の一つであろう。現在迄に行った行事と言えば、一昨年の仁川ハイキングぐらいの。下から盛上って来る声が多いのと、適当な世話人がいないのとが大きなブレーキになっている。

一応殆んどの人は落着いたと思われますから、どうです、一回集ってお互の顔を見るのも良いではありませんか。

第七期会の現状

殆んど活動していない。高一の九月鞍馬・大原方面へ行っただけ。今年の正月に何かやろうと計画していたのだが役員が集まらず流れた。尤も役員といっても卒業の時決めた訳だし、唯中学時代のクラス役員で桃高年学の者が中心になっているのだが、「めんどうくさい。やめとこう。」という訳でいつもやろうとする意志はないようだ。今年は直にいっておそらく何も出来まい。これら怠慢且無責任な態度を我々役員は認めるが、桃高以外の半数以上の諸君には大変気の毒に思っている。もう二年待っていて戴きたい。

第八期生活動状況

高校に入って二年目、後一年足らずに迫って来た就職学試験をめざして、皆大いにがんばっている様子である。第八期卒業生のわれわれは、それぞれ散々バラバラ。

しかし同志社の宏田君が昨年の冬期国体で高校フィギャースケーティングに四位に入賞したり、奈良付属高校では田中君が体育課長に任命され、創立記念会の日にもフォークダンスをおろうとか言って大いにはりきっている。

御　礼

会報刊行に際し、一面石膏の「扉子」を学校長の中村威先生に御依頼申上げ、お書き戴きました。ここに紙面を借りて御礼申上げると共に、皆様に御報告申上げます。

編集者

同窓会報発刊に際して

校長　中村威

父兄の方々の献身的御尽瘁が美事六集を結んで最勝の地に新校舎が出来必要であるため、近年中学校の歴史に偉大な足跡が残された。諸君の大部分はここに学び思い出も深いことと思う。ただ体育館講堂の三の特別教室が出来ないことは、誠に残念である。

本年は新制中学が発足してから早や十年を経過した。ここら辺で一応これまでの苦言をふり返り、また将来に期待致すべき一転機でもある。この秋のころに本校でも十周年記念の行事を持とうと目論まれつつあるが、いずれ具体的に相目が決定したらこの度附属桃山中学校の同窓の諸君が新聞を出すとのことで、諸君が母校の名の下に相互に語り合う機会を持たれたことを大変喜ばしく思う。先日私に何か書くことを求められたが、性来のこの拙文は今更どうにもならない。また大きくなった諸君に故まってなすべき言葉もない。ただ他に信みて悔のない最善の生活をして頂きたいこと、諸君の同団の人や後輩の中学生諸君の期待に答えるような立派な社会人になることを祈ってやまない。

本年は新制中学が発足してから早や十年を経過した。ここら辺で一応これまでの苦言をふり返り、また将来に期待致すべき一転機でもある。この秋のころに本校でも十周年記念の行事を持とうと目論まれつつあるが、いずれ具体的に相目が決定したら

諸君にも多数参加して頂きたく今からお願いしておきたい。

十年前と云えば日本全体が苦しみと楽しみの中から立ち上ろうと懸命の努力をしていた最も難渋の時で吾が附属中学校も例外でなかったが、早急に立派な教育の場を確立するために強力な運動が展開された。とりわけ父兄の方々の献身的御尽瘁が美事六集を結んで最勝の地に新校舎が出来必要であるため、近年中学校の歴史に偉大な足跡が残された。諸君の大部分はここに学び思い出も深いことと思う。ただ体育館講堂の三の特別教室が出来ないことは、誠に残念である。

本年は新制中学が発足してから早や十年を経過した。ここら辺で一応これまでの苦言をふり返り、また将来に期待致すべき一転機でもある。この秋のころに本校でも十周年記念の行事を持とうと目論まれつつあるが、いずれ具体的に相目が決定したら

学芸大学の勝手移転に伴ない昨年初秋頃から中学と分校との交換の話が起り、学校としても、また父兄の方々とも種々の点から比較検討、将来の発展を考慮して、苦心の結晶である校舎敷地に対する思い離い感情をすてて交換することに決定されたことは大きい展開であった。

そして本年四月上旬に補修を加えて現校舎（旧分校）に移転を完了した次第である。

現校舎には懸案であった講堂や体育館その他学芸の施設を持っていること、老朽化ので何れ改築してもらえる運命にあること、現在二階に間借している女子寮も他日適地を求めて転出するので将来相当広い地域を保有することになる高等学校のことでもあれば好都合なことなどが考慮され、また従来頭痛の種であった鉄道線路交通のはげしい危険な道路横断する必要もなくなったことも大きな喜こびの一つである。なお不要な建物は最払われる筈である。

現在の地は本校離生徒場所でもあり、一握の地、一木一草にも長い年月の教育の場としての香がこもっていて、しっとりとした落着があり、また附属小学校とも相接して教育補助としても申し分はない。

諸君から与えられたこの機会に学校が現在に到った経過をお伝えした次第である。諸君、どうか折りにふれて母校を訪れ、また母校の発展に力を添えて頂きたい。

☆　☆

雑感

本多和子

"めーめー"山羊もほっぽさんも
みんな仲良し幼稚園"

五月晴の野外で元気よく歌う声も一つに二年余りの幼稚園生活がすっかり身についた様である。

夏の訪れを思わせる様な陽下の花壇に赤黄白と色とりどりの草花に移り行く自然の流れに子供達の瞳は驚きと喜びに輝いている。

「先生ほらこんな花でしょう」「たくさんのアリがいるよ」と不思議そうにたずねてきた。

「きのうも今日もよいお天気でお庭のこいのぼりも、あんなに元気によいでいるでしょう。するとお庭のお花さん達がこいのぼりさん、こんにちは。『ぴこいさん今日は』といって話するんです。はおらお花さんがきれいにさいて『今日は』といっていますよ。」

「ふん」わかったような顔をして子供達は私の話を聞いている。

"咲いた　咲いたよ　お庭の花が
きいろいお花と赤いお花……"

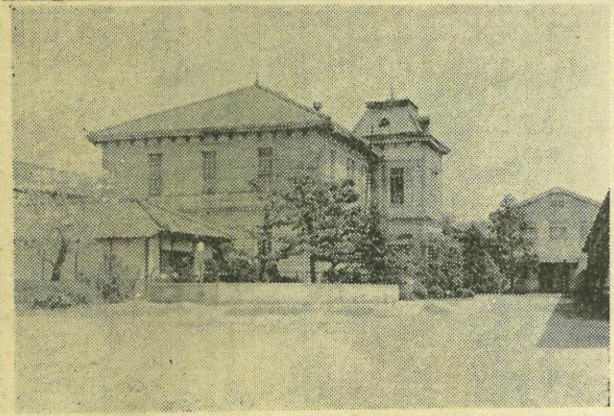
ともかく……私の日々は……澄みきった青空、すがすがしい大気を胸いっぱい吸い大自然の美しい調和の中に笑い合い、悲しみに泣きそして心から歌うのである。

お願い

尚会員名簿は大体三年毎に発行する予定ですが、氏名、学校、勤務先、住所、電話等に変更のあった場合は、必ず同窓会事務所及び同期の同窓会幹事務所及び同期の同窓会幹事にお知らせ下さい。

付中小史

服部玄尚



小史と言えば、明治時代田口卯吉の著に「日本開化小史」というのがあり、新井白石の「読史余論」とならび称される古典的名著である。

私に与へられた「附属中学小史」、思えばむつかしい注文であり出来上った結果は笑止の沙汰であるかも知れぬ。ともあれ、漠然とした記憶を辿りながら、その上小生の狭い視野を通じ、思い出すまま感じたままだらだらと与えられた頁を埋めて行こう。

私が此の学校に奉職したのは、昭和二十三年十一月一日という辞令によってであるが、実は十月十七日であった。つまり二週間たゞで働いたのである。（いうと悲壮であるが、十月分の月給は京都市で呉れるというから、同じことである）動機は何という事はないが、戦後の虚脱状態がすぎて各人の自由に対する目ざめがはげしくおこって来たとき、（という聞えはよいが、真相は）結局今までの極端な統制と抑圧に対する反動が猛然とおこった時、いわば、フランス大革命の薬がききすぎて、ロベスピエルの恐怖政治をまねいたような時代、特攻隊精神がそのまゝうらがえったような、天皇、国家にあらずして、自由という偶像（不自由な固定した）に殉ずる精神の横溢する時代に堪えなかったからである。というと甚だ訳のわからん高尚な議論と相成ったけれども、わかりやすくいえば、生徒が教師の云うことを聞かなくなったということである。

それには二つの原因があった。先ず精神的なものについて、結局教育の権威が覆がえった事である。

それまでの教育の目的は、教育勅語にいみじくも示されてある通り、「一旦緩急あれば義勇公に奉ずる」（一旦緩急の緩は急を体裁付けるための修辞であって、緩急とは危急の際を云うのである）敗戦までの日本は超非常時であり　全体主義、国家主義の権化であった。つまり国家いや国体という更に抽象的な概念を護持する大目的の為には、個人なんてものは屁でもない。個人はなくなっても国体が厳存しておればよろしいという考え方であった。言論思想の統一は厳重であるし、まかり間違って失言の一つもやれば、おそろしい結果が待ち設けているのであるから、われわれ虫けらの如き教師連は大いにその機構の末端にあって、ある者は積極的に、ある者は消極的に、とにかく国家主義のお先棒をかついだ訳である。天皇の為、国家の為、「欲しがりません勝つまでは」「ペンを銃にかえろ」など、いたいけな少年を予科練に追いやる始末であった。そしてあくまで皇国の心勝、聖戦の完遂をうたって来た。それが、敗戦によりまさに一八〇度の転回が来た。いままで一番尊かったものが、一番悪いものとなり下った。教育の権威が地に落ちた。心臓の強いのは、あらためて、だから敗けるといっていたではないかとか、俺は戦争には協力しなかったとかいうけれど、まあそれは負けおしみである。一番敏感に之を見て取ったのが生徒であるしかも生意気盛りの十五六というところだからなかなか教師のいうことを聞かぬ。教師の方にもいう事を聞かないようないろいろの制約があった。占領軍の軍政下で、歴史、地理、修身の授業は教科書から今までの超国家主義、軍国主義調が払拭されるに非んば、授業の再開を許さぬ。生徒に対する一切の体罰は許さぬ。丁度、虎が熊から牙と爪を抜き去られるようなものであるから、生徒は一向にこわがらないのである。

次に今一つ現実的な現因は、新学制の切り替えによって、生徒は新たに編成しなをされることである。もうすぐあんな教師とは縁もゆかりもなくなってしまう。今の中に大いにあばれておけというのである……之は甚だ面白からぬことであって、若かった小生にぐっと来た。大体小生はあわてものであり、日本人の欠点を代表して熱し易くさめやすい。之が一時の混乱期とわきまえる理性が働かぬ。今では少し年寄って感激性がうすれ、常識的になった気がする反面、少々淋しさを感ずるけれどもこんな新制高校に居られるもんけいとたんかが切りたくなった。渡りに船、付属桃山中学から口がかかった。就職というものは未だそう深刻ではなかったのでこの点だけは今よりはるかに恵まれていたといえる。

以上は個人的の記事ばかりでまことに恐縮ですが、側面的に新制中学誕生の頃の社会的背景をも述べた積りである。こうでも書かぬと二〇枚の大量はなかなか埋まらない。

さていよいよ入る。入って見ておどろいた。その一つは初代主事東伝一郎先生その人である。白皙そう面（やせ顔）の貴公子であるが、何ともお若い。先生方も若くて数が少い。（加藤、横井、桜井、吉川、島崎の諸先生）職員室は狭い、教室は少さく汚くくらい。全く学校の体をなしていない。生徒はいたいけなる子どもであるし失礼だが真実そう思った。之はまるで塾である。小生は少々あわて過ぎた。之はとんでもない所へ飛び込んだと思った。その中に相前後して、村上、寺本、小森、東南奥谷のそうそうたる先生連が着任職員陣営は充実して来る。ところが此校舎にまた一つ桃山高校西分校とか称するものが新に加わり、学芸大学桃山分校と三者共存となった。使用区域分が厳重に設けられるけれども、運動場の如きは共有、而もこちらは一番チビであるから、アンチャンスタイルの生意気な高校生から因縁を付けられる生徒もあったように思った。先生であるという上だまってはおれない。強そうなのをつかまえて、内心のふるえを止めかねながら、説教の一つも食わさねばならぬ。―平和愛好主義者である僕には実につらいいやな時期であった。しかしうちの生徒もなかなか意気きかんであった。水槽の鯉や金魚は一匹残らず殺してしまう。つつじは丸ぼうず、第二次元では満足出来ず、立体的に本校（我々の専用校舎は再度移転した今の校舎の庭前にあるバラック）の屋根の上を鬼ごっこするという始末である。その尻は、悉く我が輩の上に来るのである。当時のM部長の鎮座まします。部長室（奇しくも小生が今宵居している）にお呼び出しにあづかり粛々と御高説を拝聴する訳である。貧困にして実験施設に乏しい我が国において理論物理学が大いに進歩した如く、この施設に恵まれない当時の我が校の生徒はなかなかよく勉強したものである。―といって今の生徒をけなす積りは毛頭ないし、また人間は特に過去を美化して見ようとするロマン主義的な行き方をもっているものなのだから、しかし最少限度の実験はせねばならぬ。これがまた大変であった。いとも尊き師範学校生徒用の実験室の使用をおそるおそる願い出て許可を受ける。けれどもその跡始末を怠ったような場合があれば（これは仮定でなく、諸君にも覚えのあることであろうが）わざわいなる哉、善良なる君子人横井先生が出頭に及んでお詫び言上の一幕と相成るのであった。

まずかようにして今から思えば馬鹿々々しいが十分に楽しくやっていた我が中学は亦々相次ぐ恐慌におそわれたのである。それは師範学校の学芸大学昇格という、本来ならば喜ぶべき事象に付随しておこった波瀾なのであった。つまりいやしくも最高学府なる大学となった以上、その内容を名の如く改めねばならぬ。我々の存在を許された職員室、―われわれは当時そこを潜水艦と呼んだ。近代設備の粋を集めたという意味ではない。空間が極度に利用されているからである。綿密水をもらさざる東南先生の御考案により壁面には悉く戸棚が設けてあり、鴨居には棚が、廊下から物置の一隅に至るまで、我が校の全財産がすき間なく詰められて居る。ここに哀を極めたのは身長六尺を越す吉山講師であり、ゴツンというにぶい音と悲鳴がしばしば、我々の事務を妨げたのであった。―の前にさえ〇〇研究室というかめしい札が下げられ、校庭、校舎とも粋をこらして―といってもどうにもものであるから、大してもともと古いならないのであるが、―整備され、これが破壊に専念する我が校生徒に対する監視は益々厳重を極め、小生の部長室への往還はいよいよはげしくなりまさったのであった。

そして、遂に最後の宣告が来た。「付属桃山中学校は、よろしく校地を求め他に移転すべし。」「但し移転と校舎新設の予算は必要分だけさし上げる」という但し書きはしなかった。

これが文化国家、平和愛好国家日本の実体であった。職員一同いよいよ悪いくじを引いたと思った。こんなことなら月給も高い新制高校に残って置けばよかったと思ったのは、やはり凡夫である小生ばかりでなく諸先生のいつわらざる心情であったかも知れない。しかし、途は前進以外にはない。当時中学校育友会長の富部要人氏、小学校育友会長の田原留吉氏を中心とし、建設後援会が全学園父兄を対象として組織されたのであった。比の建設後援会の苦心談について縷述べることは紙面の許さぬところでもあり、また私が述べる適任でもなし、また修飾と月並な讃辞に終ることもいやであるから、略することとする。

兎に角、身をもって知ったことは擬似的民主々義下における事業というものが如何に困難で、手間がかかったかということである。この間に費した会合は大小併せて実に数百回にも上っている。又起草した印刷物の種類も数百種に及ぶであろう。兎に角、落成式とか祝賀式に想像されるような華やかな事業ではなく、その衝に当る十数人の責任者が、真に身命を削る思いで達成された大事業であったことは銘記すべき事である。われわれはこの期間を通じ、人生と社会の縮図と人の心のうるをしさと悲しさを知り尽したように思う。

兎もあれここで、われわれ机をかついで、「愛の校舎」へ避難した。桃山の高台の上、白壁の新校舎の楽しい日々が経過した。勿体ない事を申して口がはれるかも知れぬが、雨のたんびに土手が流れるのに閉口した。之は一寸した各人の注意で防げる事故でもあったかも知れぬ。――例えば排水口の保護弁――大体日本人は―というとお前は何国人だと反問されるかも知れぬが―公共物に対する観念はうすい。自分の家のガラスは滅多に割らんが、学校のやつは気前よくポカンポカンとやる。この頃始末書のブームとなった。心ある先輩諸氏よろしくザンゲすべきである。第二次、第三次、擁壁の修理とすすんで、近代校舎の偉容はあがって来た。

しかし、之も罰当りの言葉かも知れぬが―、素直に云ってわれわれはそろそろ他校なみの講堂（兼体育館）が欲しくなった。之を教育的に理論付けるならば、一校としての統制と秩序の欠如である。団体ではないが、附属中学校に個人はあって学校はないのではないかというような気がする。之を上手に云うことは出来ないが素直に云えば不便は甚だしい。壮重なるべき渡廊下の集会は寒いし、滑稽でもある。雨天の日は器物の破そんと事故が多い。ピンポン場は神聖なるべき玄関である。台のうばい合いは、かっての配給時代の行列さながらである。塀がないのは開放的でよろしいと思ったこともある。しかし泥君にも極めて開放的であるとみえて、再三、再四、盗難がある。運よく一度、盗品があがった。甲子園球場前警察署、ありがたい、大阪神戸官費旅行と、義侠心を発揮して出張した。調書二時間半、盗品はすぐもって帰って下さい。一反の大風呂敷を購入に及んで、五、六貫目をえっちらおっちら、丹波橋に抛り出した。自分のものを返して貰うのも仲々骨が折れる。とる奴がドロボーで取られるやつがベラボーとすまして居れない。

ところが貧困なる文化国家日本は教育のような儲からねものにはお金はかけて呉れません。講堂が欲しければ自分でお建てなさい。

数百回の会合、数百枚のプリントをお作りなさい。之では一寸考えざるを得ぬ。ええ容易い方法は積立金、忘れた頃に金がたまる。その中に何とかなろうという次第であった。

ところが存外早く何とかなってしまったのである。本校統合、分校と中学校舎の交換問題、今さら何をというところであるが、講堂あり、体育館、図書館悉くOK！関係者一同鳩首協議の結果、複雑な気持で承知した。机をかついで再び山を降りた。「愛の校舎」をふりかえりながら。そして皮肉にも八年前、一歩も踏み入ることの出来なかった敵？の牙城に乗り込んだのである。

京都学藝大学付属桃山中学校　同窓会々則

昭和三十一年五月十三日改正

第一章　総則

第一条　本会は京都学芸大学付属桃山中学校同窓会と称し、事務所を当校内に置く。

第二条　本会は互に友誼を厚くし併せて会員の母校との関係を密にするを目的とし、それに則った事業を行う。

第二章　会員

第三条　本会は左の会員をもって組織する。

1正会員（京都学芸大学付属桃山中学校卒業生）

2客員（母校の現・旧職員）

第四条　正会員は別に定めた会費を納入する義務を持つ。

第三章　役員

第五条　本会は会務運営の為に左の役員を置く。

1会長

2副会長

3名誉会長

4常任委員

5委員

第六条【委員】委員は同期卒業会員中よりその互選に依り各クラス男女一名ずつを選出し、その任期は限らない。

委員は各卒業クラス会に於て任意に改選することが出来る。辞任しようとする委員は同期クラス会でその旨表明し、その承認を得て新委員と交代すればよい。

委員は会務の運営に関し同期会員との連絡に当る。

第七条【常任委員】常任委員は二年毎に委員会に於て会員中より選出し任期は二年とする。但し再任を妨げない。

常任委員は会務事業の企画運営及び会計其他を分担執行し其責を負う。

常任委員は本会の運営に関して母校の同窓会係と常に密接な連絡を保つ。定数は十名とする。

第八条【会長】会長は常任委員の互選により一名選出し、その任期は常任委員としての任期による。但し再任を妨げない。

会長は会務を統括しすべての監査を行い本会の代表者にして最高責任者である。

第九条【副会長】副会長は常任委員中より会長の指名により二名定める。任期は常任委員としての任期による。但し再任を妨げない。

副会長は会長に事故あるときはその任務を代行する。

第十条【名誉会長】名誉会長は母校の現職校長を推してこれに充てる。

第四章　機関

第十一条【総会】総会は本会の目的に則り会員の親睦を深めるために開催し左の事を行う。

1会務報告

2主要な事項の議決

3会則の改正並に変更の承認

4その他必要と思われる事項

会長が必要と認めた時若くは正会員五十名以上の要求があった時は臨時総会を召集しなければならない。

第十二条【委員会】委員会は毎年一回以上会長が召集し左の事を行う。

1予算案の議決及び決算の監査承認

2其他会務の運営に関して総会にかける余裕若くはその必要のない事項の議決

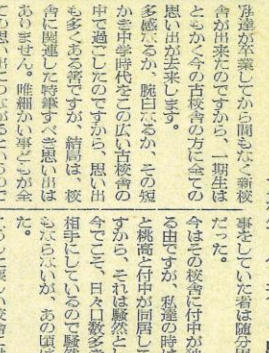
第十三条【常任委員会】常任委員会は会務事業の運営に関する議案の議決を為す他、毎会計年度末に当年度会計決算書及び翌年度会計予算案を作成してこれを委員会に提出する。

第五章　会計

第十四条　本会運営に必要とする費用は会員より徴集する会費その他の収入による。

第十五条　本会の会計期は毎年四月一日より翌年三月三十一日迄とする。

想い出



附中の思い出

一期生 今井日出男

学達が卒業してから間もなく新校舎が出来たのですから、一期生はともかく今の古校舎の方に全ての思い出が去来します。

多感だるか、脆曰だるか、その短かき中学時代をこの広い古校舎の中で過ごしたのですから、思い出も多くある筈ですが、結局は、校舎に関連した特筆すべき思い出はありません。唯細かい事ごとが全ての思い出につながるというのであって、今から考えて、本当に幼稚で、無邪気だったと思う。教室はいくら掃除をしても、その仕甲斐がなく、当時、生徒会の仕事をしていた者は随分困ったものだった。

今はその校舎に付中が独占している由ですが、私達の時は学芸大学と桃高と付中が同居していたので、今でこそ、それは驚然としていて相手にしているので驚くべきは気にもならないが、あの頃は辛かった。

こうした優しい校舎に付中が元通り、日々の歴史を刻んでいるのを聞くにつけ、そのうちに母部と校舎に再会したいと思っている。

思いのままに

一期生 井口昭子

日ごとに返す単調な事務の相間に心を手をとめて、いつもきまったように目をお窓辺には、今年も薄紫の花房をのぞかせて藤の若葉のそよ風にゆられる頃となりました。

一周ごとに目になえて成長してくるつるのあるものはとびぬけて長く、あるものは幹本からみあいながら重いあった葉の上に細く長く思いのままに手をのべてふく風にゆらゆらたゆたうています。朝毛はたくさんの若葉の淡緑は異かに茂みを増してしたいにその緑に濃さを加えそます。そして優雅な花房も二つ一つの花弁も大きくなるつつ、藤色からやがて濃紫へとやはしは深みを添えてくるのです。その頃になると葉の茂みはいよいよ青く、藤の花房はそは植込のたたずまい、ささやかな花園の装いにもそれとうかがい知ることができます。

山精する書類をタイプの騒がしい音や始終かかってくる電話のベルの中で処理しながら毎年つつじの咲く頃になるときまって中学生の頃を懐しく思い出します。一段と低くなった運動場を囲む土手の桜が花を散らせて葉の青く頃、つつじの紅が鮮やかに彩るのをまのあたり思い浮べつつ、お世話にいった先生方や卒業以来会ったことない級友の誰彼を夢多く多感な思春期の十年近い年月を隔てた思い出の中からひとりひとり思い出して懐しんでいます。とりわけ最後の一年を過したバラックの校舎は、元気一杯の男生徒が開の厚い下駄でわざと踏板いて応急にこぎを当てた床の模様も、思いがけない床の破れへづっかり落込んだすいの痛かったことも、むずかしい試験問題にさんざん頭をしぼってやっと答案を書上げた時のうれしさも、不得手な学科の時間の長さにじりじりしたことなども、すべてを包んで死のほか懐しく、些細なことにも泣いてしまったり跳上って喜んだりした感じ易い少女の頃の思い出は次から次へと浮んできます。それゆえにこの山手の新校舎へ移転した時には喜ぶべきこととは思いつつも一方ではものの寂しく、再び元へ還ったと聞いて今また懐旧の念を新にしています。

卒業後はや八年、来し方を懐しく振返りながら、母校の輝かしい発展を祈りつつ拙いペンをおきます。（東都大学会計課勤務）

附中をしのぶ

井上晃

附中を出てより高校、大学と過した私達の交友関係を考察して見る時、案外多くの附中時代の友人が身近に存在していることに気がつくのは私だけではありますまい。

附属の場合、小、中学に九年、更に幼稚園一年を入れれば十一年を共にしたことを考慮に入れねばならぬことは勿論のことですが、自らの存在を意識し始め、人格形成の第一歩にあった時代であることを思えば、故あることかなと合点のいく思いです。大体各々には懐旧の情の強いものが極めて多い様で、「あの頃は良かったナ！」等と自己の意識のうちに過去を極めて理想化、美化してしまっているものですが、私も附中時代を懐しむの情に於ては決して人後に落ちぬ心算をしています。感受性の鋭敏であった時でもあり、多くの恩師より受けた印象も極めて鮮明で諸先生の細かい辯も到底忘れ得ぬ思い出として胸に刻まれており、その性格より受けた感化が大きく私達の学生時代を規制したことは否めぬ事実です。

思い出

三期生 山田頻子

校舎に関しての思い出と云うと何と云ってもあの床板のよく抜けたバラックの一棟が浮ぶ。今は廃家同様の淋しい姿しか残していないが、それでも教室に行ってみれば、あの板壁にはまだ懐しいにおいが感じられるにちがいない。そんなに思い出の私には、夕闇迫った廊下の彼方から、練習を終えた野球部の連中の力々力々力々と鳴るスパイクの音さえ聞えて来るようだ。ただ遊びに夢中だった頃の我々にとっては、あのバラックはかえって思い出深いものがある。私のみならず青春の扉を開かれた若にとって、中学時代はまさに甘酢っぱい塊りと化す。日々が新しい気持で迎えられ、期待と矢望の縦横する中にも可愛いアヴァンチュールに満ちていた三とせ。再びは来ぬ時代を底抜けに遊んだと云う事は決して悪いものではない。

リノリューム 敷物工事 東川寺町西 湯川畳 上4469

中学生活懺悔録

六期生 木村嘉昌

京都学芸大学桃山附属中学校と云う長ったらしい名の学校に、遠いのは知っていたが、折角受かったのだから、通学の為にはるばる遠くまでおいては長れず、国語の時間、本を読まされた後で、「誰でも良いから好きな女の人を当てなさい。」と先生に云われ、デタラメに成る女の人を指名したら、知らぬ間に僕の名とその人の名が相合傘に入って居たの。その時以来卒業する迄、その人とは廊下で会っても恥かしくてタマラなかった。誠に迷惑な話だったが、卒業後、同窓会などで会ってると、最もナッカシイ気がするから不思議だ。特定の男と女が授業中に続け様に当ったりすると、教室の四方八方から時ならぬ"せき払い"の声が無数に聞えて来たのも、又、勝平さんなどが、その"Couple"を知って居て、ワザワザ当てゝ一人ニヤニヤして居たのもあの頃だったナ…と思います。

職業・家庭・保健・図工、時には教室の時間に迄、あの当時は五目並べが盛んだった。洋裁帳を切り抜いて五目並べ帳を作製し、延々二時間にもわたって大熱戦を繰りひろげた事も良くおもい出す。アブラハゲ君のアブラハゲに手鏡で日光を反射させて当てるイタズラをしたのもたしか職業の時間だった。

三年……コワカッタ薬学のオヤジが姿を見せなくなると、門前の柿の木に僕達の矛先が向けられた。

それだけでは満足出ず更には裏山に運搬して、ジキに学校へドナリ込みに来るオヤジの目をかすめては柿荷りに熱中した。弁当も裏山へ食いに行くようになった頃、ウルシの木がどんだ木であるか知った。ある日、トンチと浦サンがウルシを顔にナスクリ合ってタワムレ友結果、トンチはウルシにかぶれて顔がむくんで、ハレテ、粉をふいて…マルデツルシ柿の如くなった。然るに浦ニンは平気の平座、……これから暴納的推論に依り「ツチの皮が厚い」と云う古来の日本諺は、実験的事実也と僕は断定した。アノ時のトンチの顔を思い出す度毎に、オシロイにかぶれて、僕達にウレシイ自習の時間を提供して呉れたヒラメの事を追想してユカイになる。

三年になると女生徒もオテンバになった。オスマシ連中が毎昼休み、男対顔負けのサッカー試合を演じ、男生徒がグランドレビューを見ものるとこう珍現象を生じた。ダケド、あの連中が、同窓会の時の手刻みをウマクやれるようになった事を思えば、感慨無量である。僕の妹にも、中三になったらサッカーをさせてやろうかナ…と思っている。――料理が上手になるかも知れないから――。

× × × ×

折角便運のオヤジが寄付を出して、あのチイサイがキレイな校舎を建てゝくれたのに、今度移転になるとは残念ある。

柿の木よさらば！

サッカーのゴールよさらば！

だけど、あの校舎を、そこの生活の思い出だけは、僕達の胸に何時迄も残っているだろう。

中学時代の想い出

第七期生 毛戸節男

都の東南桃山の丘に、わが懐しの附属中学があった。でも今では下の分校へ移転してしまっている。今学期からそこで授業を始めるために、吉田先生、加藤先生などが手伝いを頭に締めた勇ましい姿で生徒を指揮して、机椅子を分校へ運んでおられるのを見た。それを見て私は、妙に淋しい気持になった。なぜならこの移動によって、わが中学のカラーが薄れるような気がしたからである。

わが校の特色の一つは講堂のないことだった。だから生徒集会などは玄関の南の渡り廊下で行われた。そして全校の生徒が丁度その屋根の下にすっぽり入った。それだけ生徒の数が少ないとわけであるが、それでも雨の降ったときなど廊下の両端の軒近くに並んでいる者は、まるでシャワーを浴びているようだった。だから今学期から我々の後輩諸君には、そのような憂き目に会わさずに済むのだから、我々としては当然喜ばねばならぬはずなのに、中学がこの丘を下ることは淋しい。

わが校の第二の特色は、あの校舎の割には広い運動場である。元は畑だったそうだが、赤土石ころが多かった。運動場の真中もたいには"ぢつぽ"を埋めた場所があって、我々がその上で跳び上って降りると、フワフワと浮落に弾力性のあったことを記憶している。又そこだけは肥沃だせいか、円くて運動には適さなかった。その理由の一つは石のごろごろしていることだった。我々は在学中度々この石を拾わされたが、一向に少くならなかった。拾い捨てた後でも、一雨来ると又石が露出してくるからだ。その上粘土質のため、雨が降るとすぐ運動場全体が水浸しである。又雨で困るのは、学校の西側で石垣の上のお沈が流れ落ちることだ。しかしそうした学校の損害を尻目に、雨の日を待望していた男がおった。彼は雨の日の休憩時間に掃場に急行し、運河開通やダムの完成に努めた。ここでは反対に運動場の東側は低い崖だった。斜面の土を崩って遊んだ。ある時我々がそこでトンネル工事の作業中、連盟ク赤先生に見つかり、皆運動場を幾周か走らされた。確かその折には我々の組の男子はほとんど西附合ったように記憶している。最近中学に来たときその場所に行ってみると、近所の幼い女の子が数人、その個斜をしゃがんで滑り降りていた。下に降りて来ては、土で汚れたパンツを払い、また登って行って滑っていた。あまり何度も滑るものだから、そこだけ滑台のように滑らかになっていた。

わが校の生徒は人数三少なかったが、どうも人物が多った。上に紹介した未来の土建親方もその一人だが、その他にも変った男がおった。例えば、唾液を導く正確にとばすことの出来る男、彼はまた個性的な人物が多った。上に紹介した未来の土建親方もその一人だが、その他にも変った男がおった。例えば、唾液を導く正確にとばすことの出来る男、彼はまた近所の百姓泣かせで学校の近くの畑に実る柿などを荒し、先生から"柿雄"と命名された。その他非常に興味がよく絶対に損をせず、皆からはすっぽうしいずっぽうしいといっても言われていた男。顔にソバカスは多いが、なかなかの豪傑肌で、その一喝で皆を震え上らせた男。（もっとも震え上ったのは女の子だけ）学校の備品をよく黙って持ち帰る男。女の子にもてる者。正義の男。情の人、等々同じ学年だった学友達の中でも数えあげれば切がない。一方女の人は言うとこれは言いとやかでしっかり人ばかり（私はあまりよく知らない事に関しては悪口を言わない賢た。）いづれにせよ、わが中学時代は、学友を挙げれば愉快な人ばかり、思い出せば懐しい事ばかりだった。

「某月某日」

第九期生 中田祥子

茅月茅日

先日、日頃あまり読んだことのない日本経済新聞をなにげなしに見ると、こんな事が書かれていた。

『教科書にある「潮岸」という漢字を生徒がカイガンと読んだ。先生がミガンとたおした。生徒たちが驚いて「違います！」抗議したがガンとして受けつけなかった。それから先生はウミガン先生といわれているのである。岩手県の海を見たことのない山地での話である』

私は、これを読んで思わず苦笑をせざるを得なかった。なぜならば、このような事が、ママあるから。

天照大神をアマテラスオオミカミと読み、テンテルダイジンとは読まないし、「潮義経」をゲンギキョウとは読まないが、「義経記」と読んだら笑われる。又、ラジオのアナウンサーや司会者でも「一コク二島」とか、その他いろいろとおかしなことをいう事がある。

日本語はまことにむつかしいものである。

茅月茅日

口だけ笑っていて眼は笑ってない笑い。こんなのを雑誌の写真などでよく見かける。又、舞台での顔のこわばったような笑顔を必要とする。

会則の続き

第六章 改正

第十六条 この会則の改正は委員会に於て出席数の三分の二以上の賛成により発議し、会員に改正案を提示してその承認を得なければならない。その承認には総会出席者の三分の二以上の同意を必要とする。

第七章 補則

第十七条 本会を運営する為に必要な諸規定は、常任委員会の承認により制定及び改廃することが出来る。

第十八条 本会則は一九五六年五月十三日より施行する。

―以上―

桃山附中同窓會報　（日曜土）十日二十七月七年二十三和昭

生活

浪人の弁

第六期生　E・Q

浪人の僕に付中同窓誌の原稿依頼が回ってきたのは僕に浪人生活を書けという事かも知れない。浪人生活を経験しない男子達にその内幕を知らせて欲しいという事かも知れない。然しこちらの身になればわざわざ赤恥をさらけ出して浪人体験記、どうして書く気になれようか。僕にはとてもその様な勇気がない、又再び今年の三月の失敗をここへ書く事はせいぜい自己嫌悪に陥いるが関の山である。僕に体験記を書けと云うなら一層の事今年東大、京大その他へ見事パスされた方の合格記を載せた方が遙かに同窓会誌の創刊号を飾るにふさわしい記事になるのにと思うのである。しかし原稿用紙が送られてきた以上何かを書かねばならない。以下はあくまで僕一個人の浪人としての感想である。

浪人生活に入ってまだ二月しかならないがたしかに浪人とは雖ものである。先日伏見図書館へ行った時閲覧カードを渡された。それには身分欄に書く欄がある。僕は何と書いていいかわからない学生でもないし社会人でもない。さりとて堂々と浪人とも書けない。遂に僕は無職と書いてしまった。

一年浪人するや、一年長生きすればいいではいいかと自分自身軽く云い聞かす事もある。しかしその浪人が一年で済むか、それは誰も保証してはくれない。大学に入った者よりもうれしい者の方がずっと多いのだと云ってなぐさめてくれるのはせいぜい予備校の教師ぐらいのもの。又こちらも大勢の友達がいる事に気を強くして割合大きな顔をして予備校へも通って居られる。しかし彼等とて来年のライバルである事には変りはない。さながら「呉越同舟」という所である。しかし毎日々々をライバルに気を許すまじと深刻に構えて送っていたのではこれから三月迄三百日たまったものではない。人間に何も苦しむ為に生れてきたのではないのだから。此の頃では割合に浪人生活にも馴れてきた。却ってあの灰色の高校生活よりも、うるおいさえ感じられる事がある。高校時代はいろ学校や、模擬試験の成績の上下に吸々と及び、又つまらぬ外聞や身辺雑事にとらはれて、息つぐまのない生活であった。（そしてそれが失敗の致命的な原因であったのだが）今もそれに少しも変りはないはずであるが、しかし、受けた大学は皆落ちた後の空しさ――恥も外聞も何もないさっぱりした気持が自分に何かしら落着を与えてくれる様な気がする。少し大げさに云方をすればあの漱石の「草枕」の那美さんの心境である。しかしてこんな気持がいつまで続くか疑問である。もう夏休みに入る頃になれば又あくせく、あせり出すかも知れない。

僕は今度浪人の原因は現在の政治経済困難にある……等浪人の弁明をする意は毛頭ない。「定員過剰」は何も大学だけに当てはまるものではないのだから。仮に大学の数を殖やすか或いは学者の数を殖やすかしたとしてもその結果は学士の氾濫だ云う又その先で定員過剰のドイツ語を深く再び明ける。授業開始の十五分前に起床して、朝めしヌキのまま学校に駆けつける。僕が教室に着く頃には席はもう後の方しか空いていない。そこへ、教師が前でモソモソと口を動かしているのを聞き、何もわからないままに、一日の授業は終る。隣の下宿人に気兼して思いっきり口笛も吹けない下宿へは、そのまま帰らない。そこで僕達は渋谷へ、新宿へ、金のある時には銀座へ流れて、映画と酒に、現実を忘れ、街の灯のちらちら消え始める頃、下宿にたどり着く。そして東京の一日は終る。

学生生活で一番楽しいものは、「めし」であろう。午前中の授業が終ると、僕達駒場の学生は、寮の食堂が喫茶部と称する協同組合茶部の常連である。ここには、「めし」になるものは三種類しかないが、それでも安い。カレーライス（一食四〇円）、チキンハン（一食三五円）、ハムサラダとライス（一食五〇円）、一・五食六〇円）、一・五食五〇円）この三つである。約二十坪の建物の中に、駒場の学生の約五分の一がなだれ込んで、この三つの内から、各々思い思いに、一食一食半の微妙なやりくりをしながら一つを選んで、屈めしとする。ひょっと混雑するので坐って食うことはまずない。立ったまま、三五円のチキンハンを食い食うのである。

夕飯も又楽しい。僕がいつも食う所は、学校の近所で、正式の家号は「伊東屋」というそうだが、僕等が「トンカツ屋」と呼んでいる店である。ここは隣の牛肉屋と提携していて、カツレツやトンカツ、コロッケ、手たべ（小型スキヤキ）等の肉類の揚立て、作立てを、五〇円から八〇円で食わしてくれる。めしの量も、「大めし」を食えば、まず満腹するから、評判がよい。しかし、巷に灯がともる頃、腹をへらして「トンカツ屋」にかけつける時、他の家から流れてくる、さんまを焼くニオイに、しばし、足を止め、御膳を囲んで一度はめしを食って見たいものだと、遥かなる故郷を想うのである。

しかし、一日の授業が終った後友と共に、校庭の芝生に空を仰いで横になり、話はつきず、あたりがタそみに包まれ、さては星の輝くまで、愛を語り、希望を語り、恋を語り、政治を語り、又、再び愛を語るとき、東京の空も、又、青いのである。

しかし入試に失敗したと云う事はそんな冗談とは無関係に厳然とした事実である。それには「勉強不足」という理由の外に何の言分けも非常も通用しない。ただ謙虚な反省あるのみである。最後に僕は僕の浪人生活が僕の弱い心にピリオドを打ち、みのりの多いものとなる事を願わずには居られない。

一九五七・五・十八

季節雑感

一雨ごとに青葉の色も鮮かさを増し木の間もれに仰ぐ空の色は格別の感覚を我々に与えてくれる。又この頃は夕方のそぞろ歩きのことよく楽しい季節でもある。若いアベックの楽しそうな語らいもちらちら目にする。私も気の向くまゝに長らく御無沙汰している恒武の御陵を散歩する者の一人である。有為変転の世の中にあって自然だけはいつまでも変らない事をここではつくづく感じる事が出来るのである。そして又孤独の楽しさを思う存分味わう事も出来るのである。

先徒の去ってしまった附属中学の校庭は何とも言えない寂しさを漂よわせている。夕日に照らされて鉄棒の影が砂場に長く落ちている感じを与えているのである。

動の後の静――いかにもこう言った感じを与えているのである。と言ってもこの附属中学も今では学家になってしまっているらしいすっかり引越してもとの学芸大学に移ってしまったらしいのであるこのバラック校舎に居り木の香も高い新校舎が出来た時私達はどうとも喜んだものだったが……

（A記）

駒場の生活

五期生　橋本謹敬

僕が東京に来て最初に感じた事は、その空の暗さだった。それは密集する工場の煙や、巷にあふれている人の息のせいばかりではあるまい。僕達が何年も生活した、あの桃山の高台の、春のあの澄み切った青い空と、木立の新緑、夏のあの冷い風と水、秋の夕やけと赤とんぼ、ことに附属中学の校庭から見たあの夕やけ、冬の朝の深い霧、それから、いろ〳〵豊富にあるあの新しい空気を、ここでは感じる事が出来ない。

学校は駒場にある。元の第一高等学校だ。昔はここも武蔵野の雑木林であったろう。しかし、今ではそうではない。果てぶくやけやきの木立のかわりに、風の吹く日には砂塵を起すほこりっぽい運動場と、いかめしい学校の校舎、そのまわりを取り巻く住宅街と、所々あまわり歩きまる学生の雑音が残っている。駒場にあって心を慰めるものは、名物のいちょう並木と、つつのの花に囲れた芝生だけであろう。

東京の朝は、隣の部屋の下宿人の友達がいる事に気を強くして割

隨想

今日は霧晴しい、勿体無い位の好天気だ。校庭から浅草山がくっきりと見えて、其処に点々と蟻の様な人々が蠢められる。私が「あんなに沢山の人が登ったぼう、ホラ見てごらん」と指差すと、「私、見えへん。」とAさんは気の無さそうに答える。

そんな時、何時も高校の英語のリーダーに出てきた、William Hazlitt の「旅をするのだった一人傾斜の雲霧を「ジグザグ行進」に歩いた。山の天気の変化の早さは想像以上である。見る間に幾重に被われた空から、雨とも霧ともつかぬ冷たい細雨が音も無く降り注いでくる。両側の山からの「ホー、ホケキョ」の声が耳に爽やかだ。霧の上を4キロばかり歩き続けた。山道に移ってから、増々雨と風が厳しくなり、私は頭痛と吐気に悩まされた。まさかこれが高山病とは思いも寄らなかった。余りにも自分の体力に自信を持ち過ぎていたのだ。

私は、びっくりしてしまった。が吐気と寒気は絶えず私を襲い、何を食べても順下を下らない。「こんなんじゃ来るのでなかった。」と心細い事を云って、先生や友達に励まされ、慰められて、樂々と夜の山小屋の頂餅清酒の中で一人嬉し涙にくれた。

朝日が射す前に、元気に不敵生の男の子達は、御来光を拝みに行くと飛出して行った。昨日とうって変った晴々しい朝である。遠い山々がくっきりと見え、緑の新鮮さは眼にしみた。雲が流れて流れていく。どんな霧が移って行く。霧の消えた後に、雲霧やはけ山や組の濃山が姿を見せてくれる。

私達は一、一眼の前に展開される景色の美しさに、歓喜の声をあげながら下山し始めた。可憐な高山植物の花畑が眼下に開けてくる。

高山植物は清らかで愛らしく、潤美さこそうか、何か貴重さの中にチラリと覗く小さな美しさが感じられる。千四五百種類あると云う。

一番先頭のガイドさんがその名を一つ一つ教えて下さる。とそれは「電話ッコ」みたいに口伝えなのに、何時の間にか「アマ草」になっていたり、「ニッコウキスケ」を「ニッコウキッネ」と大声をあげて云っているのが聞えて、前の者が笑い出して面正したりする。愈々ガイドさん自くの「ガクガク下り」になった。膝がガクガクするのを奈良弁で「げんろっく」が笑う」と云うそうだ。そのげんろっく笑うどころか爆笑し始めると尻餅をついてしまい、しばし起き上れない。雨上りの山道は「滑り台」より良く滑るのだから。

「清水平」を経て夕暮れ迫る「祖母谷温泉」に到着。久し振り（？）の青畳だ。私達は疲足それとの接触を楽しんだ。宿家の前に清らかな流れがあってそのせせらぎの音に私は心のやすらぎを覚えた。

翌朝、又久振晴らしい絶好の日よりである。「桶平」に出てトロッコで「黒部」に行き、そこから「宇奈月」に着くのが今日の予定だ。

「猿飛」の奇勝を初めとしてスバッと切った様な、直立した岩壁は千尋に及ぶ山骨を露呈している。その壮観は神秘的で、幽邃があり、その上原始的でさえある。今にも、猿がサッと、木もれ陽の中を飛んで行く様な気がした。

「黒部峡谷」の岩の一角で寝ころって「風流とは如何なる物ぞや」等と先生方と語り合ったり、墨絵に時間を費したりした。

「水の透明さよ、その青さと冷たさよ、澄み切った空気や光の鮮明さ、ゴツゴツした岩の肌さわりとあの薫風」が尚々私の胸を締つけんばかりに浮上って来る。

晴れたある日、若草山やその一連の山々を眺めていると、私は色々な山での思い出に、時の立つのも忘れてしまう。

登山の魅力は頂上に登る事ではなくそれ迄の過程での楽しさだ。これは登山前後の旅行の楽しさも含まれている。

何と云っても私は、一人ボッチじゃなく、数人いやそれ以上の友人と共に苦しみ、共に楽しみを割ち合いたいから、登山や旅行をしたいと思う。

あるささやかな山ある記

藤井裕子

天気は良好。高い高い天は淡い空色だ。雪の白さと樹々の緑、そして青い空との対照と調和の美しさを満悦しつつ、私達はほぼ35度

続「某月某日」

某月某日

どんなに気心を知り合っているつもりの親しい人と話していても、その瞬間のその人の心の中の状態がどんなになっているかは、本人でないとわからないし、あるいは又、本人自身もわかってないかも知れない。

自分でも気がつかない程微妙な、人間の心の中のことが、どうして他人が見透すことが出来るだろう。

考えてみれば、人間同志のつき合いなんて、絶対に奥底に触れ合わないものであって、永遠の謎に包まれているものかも知れない。だから、そこに、誤解やゆきちがいがあって当然なのかも知れない。

某月某日

イエス、ノーをいってもはっきり言わなければならない思いながらどうしてもノーとはっきり拒絶することは出来ない。

男の人は、どうだか知らないが、女は、神経がこまかい（？）自分の立場を守るためや、人に悪く思われたくないという気持、それから自分自身で決心のつかない時、ついへの言葉にゆらいでしまう。後で何とかなるだろうという安易がするさ、周囲の人への気がねなどから、ついはっきりした返事をせず、後悔の種を蒔くことがある。

やはり、いかなる時でも、言うべき時には、強い意志力と勇気を持って、イエス、ノーをはっきりと言うべきであると、つくづく痛感した。

伏見の清酒
百萬弗
京都 吉村酒造株式会社 伏見

清酒 招德
京都 伏見
共栄酒造株式会社

体験記

断想の夜記

今井日出男

[illegible]シーンと静まりかえった教室。放課後私はそこでペンを走らせている。五十一の机と椅子を眺めながら、強制的に思考されている感じで同窓会報の原稿を書いている。しかし強制的な思考は継続せず、文想は浮んで来ない。暫くぼーとしていると整頓された机の上から笑顔の子供が一人また一人と現われ私を励ましてくれる。今日腹痛でしかめつらしい顔をしていたN君も笑っている。「明日は元気に学校へ来るんだな」と言った途端、私の幻想は現実にバックしてしまった。その時お茶目なT子が教室の戸を開けた。「先生、忘れものを取りに来ました」と真面目な顔をしている。「またか」と笑って答えてやると「ふん、じきにわすれんねん」T子は笑てっソロバンと地図帳を持つ。「さようなら」「さようなら」また元の静寂さである。午後五時も過ぎれば、学校は寂莫たる感をあたえる位である。音一つしないのであるから、かえって不思議な気がする。子供が活躍している間は学校は騒音々の連続であるから余計にそう感じるのかも知れない。

宿直の夜はその寂寞さに人生を考えることがある。哲学の書に親しむのも、二週間に一度訪れる宿直の夜である。また好きな歴史書に親しむのも宿直の夜である。その時に得た知識や感想を子供達に話してやると、日頃腕白小僧を自他共に許しているH君も真剣に聞いている。五年生にもなると、抽象的な事がわかるのであろうか。

そろそろ教室も暗くなって来たようである。遅々として進まない筆に見切りをつけて職員室に帰えることにした。「子供達よ、さようなら」「教室が暗くなるまで学校で勤務するのか」と訪ねられそうであるが、さにあらず今日は宿直なるが故に遅くまでいる訳である。

ジジー、電話である。友人からである。「会報の原稿すまないけれど書けないから良ろしく頼みます」という返事だ。「困るな、何とか書いてくれないか」。「同窓会報というと大儀になって書けないんです」「困ったな」という次第で惨敗である。

断想の文に見切りをつけて、何でも良いから書いてしまう事にする。読んで頂く方に気の毒であるが、ともかく、これが事実だから仕方がない。

“降りつづいた雨も
からりと晴れて”……

と、私が弾く下手なピアノの音をかき消す如く元気に歌っている子供達。算数の時間は消沈していても体育ともなれば活躍する子供。同じ図鑑をあきもせず見ている子供。十人十色の性格を持つ子供達と共に生活して満一カ年を過ごしている私の一日は相変らず多忙である。

じっとしているのが好きな癖にじっとしていられない自分の性格として、小学校教師は適しているのではないかと、変なところに自信をもって日々生き甲斐を感じている。「お早よう」から「さようなら」迄子供達と接している間、私はどれだけ話をし、身体を動かすであろうか。夕食を済まし、風呂に入ってしまえば、夕刊を読むのさえ憶くうになりすぐ横になりたく思う時が今でもある。自己の身体の限度を十分に知っていても子供可愛さについ無理をするのであろうか。ともかく発らつとして成長期にある五十一人の子供と勉強し運動し遊ぶとそれは自己を忘れる位全ての神経は五十一人の子供に集中される。

若輩の間は先輩の様に豊富な経験がないから、持ち前の若さと熱情で頑張らなければならないのは教師のみならず、何れの職場に勤めても同じであろうと思う。

銀行や会社勤めをした経験がないので私はそれと比較する事は出来ないが、ともかく教師は生きている人間を相手にするのであるから毎日同じ事は絶無である。バラエティに富んでいるから時間を持ちあます事はあり得ない。油断は許されない。ともかく子供はどんどん成長して行くから、それに比例した自己の人間修養を痛切に感じられる。それだけにやり甲斐があるというのである。

例えば私は音楽会に行く。教師という職業意識を除いて音楽を楽しんでも、それはやがて音楽の学習に活用される可能性がある。又私は旅行好きで休暇を利用して絶えず旅をする。旅先きで子供達に絵はがきを送る。貰った子供は地図を拡げその地名を知り、やがてその土地の事を知ろうとして私に話かける。又、私は歌舞伎は元より新劇のファンであり、よく観劇に行く。その観劇経験は、いつかの教壇生活で役に立たないとは誰が断言できるでありましょうか。

オットこの辺で迷文もストップをした方が良さそうである。予定の紙数もこの辺で到達しそうだ。やれやれ御役目御免でスッとした。やがていやな梅雨の季節がやってくる。

「今日もまた雨。子供達は何日も教室にとじこめられて、元気のもっていき場所に困っているようだ」

と日記帳に書き綴らねばならないのか。広々とした雨天体育館が欲しく思う。

思いつくままに

第二期生 井上晃

学生生活を終え、一社会人となって、早くも二カ月、来し方行く末を思い感慨深いものがある今日このごろである。

今就職してサラリーマンとなって見ると自分の生涯がある程度、定ったとの感が深く、安堵感に似た喜びを感じると同時に、楽屋裏まで覗いてしまったといったようなある種の淋しさを取払うことの出来ないのは一人私のみであろうか、それにしても思い起すのは、小学校卒業の折に記念帳を作製しその中にお互いの将来について約束し合った一事である。僕は五年後には小説出版、大学は経済学部を経て実業人になるなんて書いた様に記憶しているが、幼な心にも自分の適性をある程度掴んでいたかと思うとひとり顔も綻びるのである。尤も私の書いた実業人は大実業人、大企業家を意味していた心算だったし、一介のサラリーマンとはいえかつての約束を反古にせぬ様な人間に成長したいものだ、ケセラセラ、とは流行った言葉で、退嬰的、頽敗的で嫌だったが、意味深だと感じることもよくある。自分を取巻く運命的なものの支配に、また社会的な風潮に反発を感じつつ、更にまた「運命よそこをどけ俺様のお通りだ」などと豪語しながらもどんどんと押し流されている自分を意識することもしばしばである。最近一般に思想の退潮ということがいわれ、それが微妙に反映した学生間にあっては、ただスマートに、堅実に、要領本位に生きて行こうとし、自己の信念を貫らぬいて行こうとする、若さと積極的意志に欠ける傾向が見られる。私は就職試験での体験から頭の良さはさて置いて、社会は矢張り、荒けづりの気骨ある人間を強く求めており、学生には無垢な若さと、運命に打勝たんとする情熱が不可欠なることを身にしみて悟ったのである。私の中学、高校時代は今にして思えば随分老成した傾向があった。当時はそれでも正しいと信じての態度であり、後悔する気は毛頭無いが、丁度当時の私を髣髴せしめる生徒に出くわした折にはぞっとして冷汗が出る思いがするのである。

しかし私は同志社の学生生活においてその殻だけは破り得たと思っている。同志社のもつ精神、雰囲気から自らの生活態度の基底となるものを得ようと努力し、四年がかりで十分と行かないまでも掴み得たと信ずるが故であるが、なかんづく弓道部に属し、古風な扮装でのことだったが、三ッ葉のクローバの部旗の下、総てを忘れ、母校の栄誉の為に闘い抜いた感激の数は、それが苦しいものであっただけに何ものにも換え難く、必ずや生涯私の支えになるであろうことを信じて疑わないのである。

私は今私の属する会社である大沢商会を心より愛している。そして一生を立派な伝統と業績に輝くこの会社の発展に捧げること以外考えていない。かつて桜井先生より授業時間に「自由と規律」を紹介して貰ったが、これは私の座右の書となった。

本書はイギリス人の生活態度を説くが「自らの置かれた位置に誇りと満足を持ちベストを尽す」は本書中私の最も大きく感銘を受けて読み取ったところであり、現在の私達若人にとっては何ものにも勝る支えであり、武器であろう。

（大沢商会東京店自動車部品部）

一足先きに社会に出て

三期生 中島章

久方ぶりに真面目に筆をとると云う事は私にとって誠に嬉しい事だ。長い間夢中で過して来た今はこういった好機会を与えられた事に感謝したい気持で一杯である。聞けば母校があのおんぼろ校舎？に又々帰ると云う事で、昔の情けなかった貧弱な時代を今さらの如く思い出させる様だ。卒業して六年余り、例によって年月の経るのは早いもの、社会の情勢の変遷と共に私自身も様々に変化していった様だ。現在もなおその変遷の過程にあって汲々としている有様である。他の諸兄等とは一歩先んじて社会に乗り出しては見たものの、その世間が存外の食わせ者で、すっかり私をまごつかせてしまった。今となって見れば漸くその綾ものみ込め、よちよち乍ら仲間入りをさせて貰う様にまでなったものの、未だに不安と恐怖がこの事を取巻いている。世間で云う世渡りのうまい男、女でも同じ事だが社会では先程はこう云った類が何事に於いても成功するのであるが私は未だにそう云った方面の知恵が働かぬのかさっぱり駄目である。自分では一生懸命努力している積りでも、仲々うまくゆかぬ。兎に角方法は解り過ぎる程解ってい乍ら且つ実行出来ないのである。ずるい方法だが世間をうまく渡って行かうと思えば、要領、機敏、知恵、体力の要素が必要だと思われる。要するに自分を認めさせる技術と云うものを得なければ駄目だ。いはゆるセールスマンシップを必要とするのである。世に云うセールスマンではなくして自分の持つ商品、思想、政策を他人に与え得る力を有った人を指しているのである。でなければ現在の所謂セールスマンと云はれる人々は機械と寸分も変りなく、むしろ機械の方が計算が正確でずっと良い位だ。人間でなければ出来ぬ仕業、それは人を説得する、人を動かす力である。芸術家にとって良い芸術を生み出す努力はそれ自身純粋であろうが、客観的にみれば現代に受け入れられる何物かを生み出そうと努力していると思うのだが、これこそ先の努力と同質のものではないか。

私は社会的矛盾と云うものに対して悩んだ時もあったが、結局は如何様な努力も一陣の風に吹き飛ばされて客観的には純粋であろうとなかろうと現代は自身を売り出さなければ生き抜いてゆく事が出来ないと云う事に気がついたのだ。

世の中に頼りきれるものは自身しかないのである。余りにこの考えは個人的なもので社会的な面を忘れ過ぎていると思はれるかも知れない。しかし如何に新思想を抱いたとしても、行動が旧態然としていればその人は古く、反面、古いものが清算しきれなくても一歩一歩新らしいものにふみ出す実行力があれば新しい人と云う事が出来ると思うのである。私自身、理論に没れてしまって何を生み出すこともなすことも出来ないが、しかしかかる纏った思想をもって世の中を生き抜いてゆくと云う事は確かに必要であろうと想われる。

時に憤懣を感じた時は後向いて舌を出していても相手に対して愛嬌を振りまくと云う二重性格を自然と会得させられた事である。

最初のうちは嫌で嫌で堪らなかったのだがこれも社会的本能でお世辞と云われるもので仕方なき事なのである。人間には優越本能と云うものがあるものでこれさえ満足させてやれば充分なのだ。

経験は数多くする程人生の生甲斐と云うものが大切に思はれて来るが、私の下らない経験のひとつを此処に披露させて頂いたが、参考にされる人はともかくとして、そうでない人は軽く聞き流して貰いたい。

現在私自身満足した生活を過しているかどうかは、諸兄の勝手なことである。

サラリーガール雑感

五期生 村田靖

思い出すとお可笑しなものである。私が現在サラリーガールとして毎日満員電車にもまれて銀行という一つの資本主義の建物の中へ吸い込まれて行く。初めは確にお可笑しかった。しかし今では全然お可笑しくないどころか実にピッタリと自分の身について来たのを感ずるがそんなことを裏書きするかの如く「村田さんもすっかり事務員が板についたなあ」という上役の人の言葉を聞くと何故か冷汗流れる様な必地がする。それは長い学校生活に区切りをつけてと学生の純情な理想と希望に燃えて飛び出した実会社が自分のものとはおおよそかけ離れた夢であればこそその中で自分を生かしてみようと激しい闘志を湧かせてみたものだからです。しかし早いものです。新緑の候を迎えると私も完全に二年生になり仕事にもようやく慣れて他の人達と和して仕事をして行けるようになり入行当時の不安からはいくらか救われるようになった。そして一種の落着きをもって通勤するようになった。以下は職場二年生の甘い社会の描写である。

朝の空気のこと。

四季はめぐり新緑の候、今朝もまた窓ガラス越しに外の緑が美しい。殆んど眺めたことのない庭の草花が目新しいように目に入る。一日の初めである朝の出発が一番重要な役割を持つサラリーマンの生活、冷い白壁と相対して空気の悪いビルの中で一日の三分の一以上を過す私達がこの味のない空気を最も甘味な新鮮なものとして味いつつ店へ行く。本当に社会生活に入ってからというもの時間を自分で征服することは勿論使う事すら許されず常に無形の時に縛られながら殆んど定まった生活をしている。それを少しでも変化に富んだ時間に制限されていながら自分でぐいぐい推し進めて行くように感じながら仕事をしようと張切る。さあ今日もなんだか一日楽しく出来そうなそんな気持を朝の空気は与えてくれる。空気の悪い冷い感じのビルの中というとそれは建物の与える感じであってその中で働く私達行員、少くとも私にとっては全く楽しい一つのサークルのようなものである。

職場というところ。

一口に言って職場とは一つの雰囲気といったら一番ピッタリとしそうである。学校におけるクラスも一つの単位であるけれども独立した人達の集りでない所に大きな違いがある。学校の生真面目さで物事を判断しようとして今まで完全に割切れていたものが「今度はそうは行きません」よと先輩に教えられて怒って見たりしたものだが「ここでは道が一本ではないのです」と言われるとその時は温しくうなづいてはいるもののすぐ反発心の湧くのをどうすることも出来ない。

それだけ若いのですと自負してみたくなる時もある。しかし「お早ようございます」「お早よう」九十人近くも人がいると中には一日中声をかけることすらない人が多い。そんな中で朝の一時互いに挨拶を交すただそれだけで今日一日その人とはうまく仕事が出来そうな気がする事を思うと又なごやかな雰囲気の重要な事を身に浸みて感じるベロメーターの如きである。卒業時の卒論とは逆に二年生に昇格の印の「入行二年生の感想文」の中にも書いたのだが、何をさておいても現在自分がこの職場をこよなく楽しいものとし毎朝が期待の内に出勤出来るという事程素晴らしいことはないであろう。毎日が実に愉快なのである。だから銀行に入る前に抱いていた銀行という特殊な職業の持つ陰気さそんなものはすっかり吹飛んで行風にもまた店自体の空気にもよるのであろうがすっかり立場を変えて賑やかに陽気である。私達はこの空気を有難く感じている。この気に慣れて今ではむしろ学校時代より伸び伸びと仕事をしている。昼休みの狭い空地でのピンポンやバレーボールが精神にこよない油となって流れる。しかし皆熱心に仕事をしている。

働くということ。

働く即ち仕事をするという事は現にお客様相手の仕事となるとスポーツをするのとは違って他人の思惑に従って神経を無暗に緊張させたり頭を回転させたりするのであるから先ず楽しみより苦役に等しい。こうなると「労働は苦役であるが故に神聖である」という表現をしてみたくなる。しかし自分に与えられた仕事を運命としてその日を無為に過すより同じ働く身であるならば自分の仕事を研究題目としてその中に楽しさを求めて行けばどんなに愉快かと思う。実際気分が勝れず仕事をしたくない時もあるが一度張切ってテキパキと仕事を処理して行く人を見ていると羨やましくなって来て自分も他人から羨やましがられるようになってみたいという気がしてくる。

職場で働くという事の中で仕事をする上の男女同権という言葉をよく耳にする しまたよく論じている。私もこの事については色々考えてたのだが先日同僚の男の人の言った言葉の中に実に痛い点をつかれた言葉があったので一寸参考に供したい。「女の人は男女同権を女の特権のように口にするけれども女の人は女であるという事に甘えている面が実に多い。だから女の人のそういう面を云々しない代りに女の人の言う男女同権は認めないことにしている」私はそれを是定せざるを得なかった。働くという事がその人の動的な最も美しい姿であるからには喜びを伴うように心掛けるべきだと思う。

とりとめもないことをだらだらと述べて来たが私は今仕事を覚えてたのしく仕事をするという目標を得ている。私の生活の喜びの半分を職場に求めて残りの半分を自分の生活の喜びに織り込んでいる。仕事が仕事である以上夜は遅く殆んど自分の時間がない時が多い。そんな時にもどこかに余裕を見つけてスポーツと読書に傾注させている。生意気に大阪は船場の繊維経済界の情報に耳を傾けて新聞の経済面を一番に見るようになったのが一番大きな変化であるといえば笑う人もいるであろう。「小人閑居して不善をなす」との諺に毎日忙しく過している。

小品

夏の川岸

今まで吹いていた風もやみ、今はただかすかに、芦の葉のざわめきが聞えるばかりである。高くすきとおった夏の大空に、太陽がねむたげな光を放ってにぶく光っている。岸辺の芦のざわめきも、もう聞えない。しばらくの間、地獄の様な静けさが続いた。ちょどその時、このねむる様な天地の静けさを破って、一捜の川舟が下って来た。中には一人の老百姓がきせるをくわえ、のんきそうにたばこをふかしている。老人の手の竹竿が時折、思い出した様にばしゃりと水面を打つその時が沼の水面に伝わって無気味に響く、それに答える様に、よしきりのしゃがれた声が聞えてくる。しかし、しばらくすると川舟も老人を乗せ、芦の間に姿を消し、よしきりもまた、どこかへ飛び去った。そして再び、この沼のほとりはもとの静けさにつつまれ、無気味な静けさが続いた。

夕立

今まであんたによい天気だったのに急に空がくもり出し勇ましい音をたてて、

大つぶの雨がふって来る。道を歩いていた人もみんな四方八方の軒下に集まって来る。ふろしきをかぶってとんでいく人も、ふろしきをかぶっていく人も、ふろしきがぐっしゃになったのか軒下にくる。

雨の中をいっさんにかけて行く勇かんな少年、馬はかわいそうにひずめをたてて、雨の中を一生県命かけて行った。

Y・F

憤慨孤兒記

第二期生　木崎　久子

体験記を、という事で原稿用紙にむかってみたのだが、生をうけて二十余年の歳月の中で体験した事は多大したものではない。まして私だけが異った生活方をして来たのであるわけではない。人間そのものが当然体験すべき事を体験したにすぎないのかもしれない。が私は現在勤労生活という立場にある事が、こんな生活方もあるのかという事だけでも知っていただけると、勇気を出してペンを握った次第である。だからお話しても何も役立たないてつまらない人間生活の一こまにすぎない。

○　○　○

「無理してる」はっきり自分で感じられるほど疲れきった身体、動くたびに節々が音をたてる。「明日の務めもあるしどうしよう」ふと脳裏をかすめた気持ふに、足はやっぱり学校の方に向っていた。睡眠中（という表現が適格なほど夫急きで）蒲団をくぐった時はすでに講義はじまって居り五時半からの講義もあと三十分ばかり動に対しては絶対に後悔はしない私も、あのころ……（高校卒業を目前にひかえたこの）自分の能力に不相応な野心をいだきえしたかったら（その野心が）生を左右するほど重要な意義を持つ持たぬにかかわらずサリーガールとして勤めていた会社に残業の出来ない人は困るという一言によってさっと止めてしまった。これが学生に対する無理解を知った最初であった。勤労学生が勤めを生活の手段やわれて学校をうとうと思った時は可能性を伴う事である。それは経済的基礎がないからである。その日から私の不安定なアルバイト生活が始ったのである。ただでさえ疲れた身体があふれていたのにアルバイトがそう簡単には見つかりはしなかった。アルバイトもコネクションが必要なのだ。どんな仕事に対しても熱意を感じた事は一度もないが区役所での臨時も、会社で計算機をまわす仕事、石鹸の包装も、年中あるわけではない。一ヵ月、二ヵ月、あるいは十日の臨時雇傭の生活は精神的に如何に不安であったか、アルバイト学生というと、アルバイトの中で誰れも感じる事だと思う。アルバイトという雇傭形態は労力が必要な時のみ求められるものである以上在事の断続は当然の事とはいえ仕事のない時は本当にどうしようもない焦燥にかられるあせくれでもあった。安定していない毎日に一層拍車をかけられたあり様に完全なノイローゼにかかり何度も目的を変えようかと思ったりしたものだ。けつまずいてもまた立ち上るエネルギーは学校に行って同じ仲間に不満をぶちまけて共に憤慨しはげましてくれる事によってわいてくる。「フンガイエジ」のニックネームをちょうだいしたグループは私にとっては難うじて生きている状態の大きな支えだった。一年半の浮草の様な生活から解放されて感じ、ありがたかったが、戦争時間のきまっていない職場へ学校へ行く為に他の人より早く帰る事は以前にもまして精神的に重みをかぶわされる結果になった。五時を打つ時計の音に今いろうかかとチャンスをねらっている内に十分、二十分はすぎる。早く講義に出たいが「すみませんおさきに失礼します」それだけの事いうのにどれだけ勇気がいるか。

毎日一度は必ずその関所を通ってたどりついた教室で、御所の樹々を真赤に染める夕映の中に講義に耳をかたむける学生のやつれた頬が桃色に輝やく時が学生である満足感と云いしれぬ安堵の瞬間である。

大学へ行く事だけが勉学する道ではない。意志さえあれば学校へ入る時何度か考えて みた問題を、女子だから編入して来た何時間目かの講義はっきり解った。学問をする事によって得るものは人によって違うだろうし、三年四年の専門の教育をうけたところでどれだけ世の中に役立つものでもないが、学問を通して思想という世の中を正しく批判する目を培ちかい身につけて行けばよいのだ。その為にやっぱり苦しくても学べって長続してなるほどおたかがいても学校へ来て良かったとつくづく思うのである。仲間のよしみでないもりだが、私の知っている勤労学生はみんな真面目そのものである。誰だって好きこのんで夜学へ来ているわけじゃないのだろうし、昼間の労働の疲れをふりしぼって学んでいる姿は本当に真剣である。余り真剣すぎて一部の友達連中は一部の学生はせちがらいなんて悪口を言う位だ。夜学生は時間がないので充分に勉強する事が出来ない。それが一番辛い事である。が学校へ来るだけで生甲斐を感じられる事はやっぱり生きる上にプラスだと思う。何故学びたいものが充分学べずに身体を気にしながら働き作ら学ばねばならないか？一部の学生がすべて経済的に恵まれてはいないと思う。血はげましてくれる事によってわい学生もあるだろう。そんな苦労の必要のない人達も多く一度何故学びたいものが勉学をボイコットする程の働きをしなければ学べないかという原因をみつめて考えて欲しいものだ。現在の社会の中のどこかにその欠陥があるのではないだろうかその欠陥と働いて働けど働けどその生活の楽にならぬ一多くの善良な市民が重税をしぼりとったり、六、三、三、プラスクの学校制度を生み大学入学に血まなこにならねばならぬ不健康な浪人生活を送る若者が沢山作って行く原因と相通じるのではないかと思うのである。能力と意志のある青年には経済的な心配なしに充分な学問の追究が出来る世の中になったらと心から念するものである。

今すぐ解決され得ない社会の大きな問題である以上私達はその小さな礎となって次代の青年為の為に努力しなければならないと思う。現在の私達には出来て夜学へ行く事に対する肩身のせまい想いや、時間どおりに行けないつまらぬ遠慮、冷たい偏見から救われ、多くの人の深い理解が欲しいと望むのは無理な事だろうか。夜学へ行っている為に仕事をおろそかにする事は許されるべからざる事であり、どんなに疲れても生きる目的に向って真面目な事を知る為に学ぶ事は自分少ない事、人手の足りない事、会場雇等を挙げればきりがない。とにかく委員（実は商等小使）は何とかして人を多く集める為に面白そうな行事を行うのに努力を払う。こういう事をするのが果して本来の同窓会であるのかどうかと疑いながら。……　努力はするが、腐ミリも人手も足りないので、結局映画でもるるというの新高校一年生が八九十人、それに上のものが少しずつ集まる。皆は後の方の長椅子にグループごとに集って ガヤガヤしゃべって、会長の挨拶を聞き、映画だり何だりを鑑賞して、サヨウナラという事になる。ヨコの連がりはあっても、それが若干しているだけで、タテの連がりはたんかあるものじゃない。

◇　◇　◇

同窓会なんて、そう難かしく考えなくてもよいのである。同窓会の総会が成功したかどうかという判断は、どれだけ多くの人が、どれだけ熱心に半日を過したかというスケールで考えるのが一番妥当であろう。ところが、新会員と年長者とではクリエイション一つにしたって、全然興味の対象が異なっている。しかも総会においては、各学の間の連がり、話し合い等期待出来ないとすれば、総会なんか止めちまえという事になるのである。

◇　◇

では総会を止めてどうするか。筆者はここにおいて小集団に期待を寄せるものである。

例えば私達員のものであるが、普通の会員よりも集まる機会が多い。特に落伍委員等は年齢もそう違っていないし、色々会合を開いたりするために、色々とマジメな話や馬鹿話がはずむ事がある。現在では、まの仲間意識とは御善遇にも言えない様な意識であるが、これは各学の連がりの前導的形態であると思う。これは委員という共通の会員があるからだが、普通の会員でも、この様な会合を持ちとすれば、色々と出来ると思う。例えば中学校の時のクラブである合唱クラブが中心になって、歌を歌う会を作っても面白かろうし、無線研究クラブが集って、御得意の気焔を上げてもよい。その他家の近いいの同志が講習会を作る事も出来るし、バレー部がチームを組んで対外試合をする事も考えられる。私達はその様な動きが下から盛り上って来るのを待ちつけている。同窓会は、それらの集りがうまくやって行ける様に、経済的或いは技術的協力をする積りである。この様な集まりなら、年齢が異っても気軽に出席出来るし、色々話合いも出来ようと思うのである。しかしやはり大事なのはクラス会であろう。この紙上にも各期の同期会の活動報告が載る予定であるが、極く少数の例を除いては、うまく行っていない様である。会員が、委員は意欲であると非難しながら、自分から積極的に盛り上げて行こうとしないのは無責任である。

◇　◇　◇

同じ学校を出て、色々な方面に進んだ人が寄り集って、自分の立場から色々と話し合うのは、実に愉快であり、有益であると思う。同窓会こそはやはりこれをめざすべきものと思う。本紙上に色々の方面の人からの色々な声を載せたのはこの様な意図からであった。今年は総会を総会は開けなかったが決して止めてしまったわけではない。父兄や学校と協同で行事を行うという案も出ている。これを機会に会員の皆さんが積極的に同窓会に参加されん事を期待して止まないのである。

新入会員の皆さん。皆さんの期待されていた同窓会はこの様なお恥しい状態にあるのです。しかし私達は皆さんの若い力に期待しています。皆さんが中心になって、同窓会を発展させて行くという意ごみを持って欲しいものです。それから、皆さんはこれから色々と思います。そんな時は自分一人ではかり考えないで、友達や先生、上級生にも話してごらんなさい。何かプラスになると思います。

会員の皆さん。何かやってみようじゃありませんか。クラス会でも小さな集まりで、話し合いもケンカでも。お互いの健闘を祈りましょう。

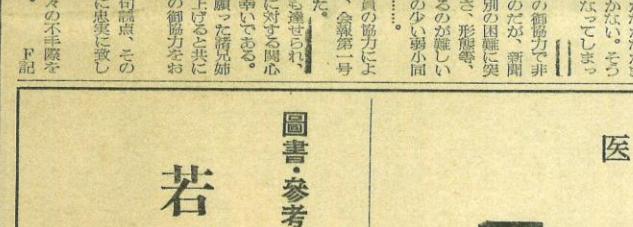
一委員の繰り言

小島　秀夫

今年の四月に百余名の新入会員を迎えて、私達の同窓会会員約八百を越える事になった。この同窓会は、初期の卒業生の人々の努力により、あの困難の時代の中で基礎の地固めが行われたのであるが、しかし現在同窓会の基礎は未だ不安定であるとも言われる。足許をすくわれる程大きな問題が形成されつつあるのである。

今年の同窓会の人も言っていたが、毎年春になると、「今年の総会は何をしようか。」と委員連中は頭が痛くなる。委員連中といっても、数人もいる事は滅多にない。だから衛や駅や銭湯で、「やあ。」とか「久しぶりだな」次に中学を最終学歴としている人は殆んどいないから、皆それ程同窓会等というのに興味がない。同窓会の総会より面白いものが一ぱいあるのである。だから、他校の同窓生の様に、「今度の五日は総会だな。」とか「もうそろそろオーケンダンスの会があるな。」と待っている人達の事は少ない。これは勿論一般会員の責任だけでなく、委員の責任にもある。

この他細かい仕事はやれる人はあっても、指導性に富むリーダーが少ない事、委員は意欲であると非難しながら、自分から積極的に盛り上げて行こうとしないのは無責任である。



編集後記

桃山附属中学同窓会は何をやっても、近年はうまく行った試しが無い。失敗続きで弱体化して行くばかりだ、何とかしなくては……と言うので、常任委員会の結成となった。その活動の第一歩として計画されたのが、この『同窓会報』の発行である。

予算の関係で新聞形態で決定はしたのだが、実際に動き出してみると、委員相互間がなかなかまとまらず、うまく行かない。そうこうする内に六月になってしまった。

原稿の方は諸兄姉の御協力で非常に順調に集まったのだが、新聞形態にした為、又々別の困難に突当った。原稿の長さ、形態等、色々のものを掲載するのが難しいのである。手持予算の少い弱小同窓会の悲しさ故……。

しかしながら各委員の協力により、遅れはせながら、会報第一号が発刊の運びとなった。

その目的が半分でも達せられ諸兄姉のこの同窓会に対する関心が少しでも深まれば幸いである。

本報発刊に御協力願った諸兄姉に心中より感謝申上げると共に今後この様な機会への御協力をお願い致します。

追、文章の形態、句読点、その他内容は総て、原稿に忠実に致したつもりです。

最後に編集上の種々の不手際をお詫び申し上げます。　F記

清酒
大正菊
京都伏見
川村酒造吟醸

医療法人
岡本醫院
院長　岡本隆一
副院長　岡本知藏
京都市伏見區京町九丁目五〇
電話伏見59・379

圖書・參考書・雜誌
若林書店
京・伏見區丹波橋驛前
電話伏見　一六六五番